

人間は「自由にして依存的な存在」

「ブラックバード 家族が家族であるうちに」に寄せて

松田 純

この映画はデンマーク映画をリメイクしたものだが、舞台は米国になっている。オレゴン州やワシントン州などいくつかの州では、医師による幫助自殺が合法化されている。余命6か月未満と診断された末期患者が、生命を終結させる薬を書面で自発的に請求した場合、医師が致死薬を処方し、それを患者みずからが服用して自殺を遂げる。医師が直接、致死薬を注射するなどの行為は認められない。映画の舞台は医師による自殺幫助が合法化されていない州であるため、自殺を手伝った家族は自殺幫助罪に問われる。

難病をわずらうリリーはけっして末期ではない。彼女は人工呼吸器、胃瘻による人工栄養などをつけて寝たきりになり、他人の世話になって生きることを極度に嫌っている。そこで、まだ自分で動けるうちに、自分の決断で自死することを選んだ。家族もその決意を理解し、最後の晚餐を心ゆくまでに楽しもうと集まってきた。しかし、集まった全員がリリーの自死への決断を心から支持しているわけではなかった。家族の心は揺れ動き、最後の夜に、事態は思わぬ方向に展開する。本人の自己決定に家族も同意して、皆に見守られて旅立つという単純なストーリーではない。安楽死や自死を美化するだけの作品でもない。

とくに次女アナは母の選択を受け入れることができずに悩んでいた。母は娘たちに「強く自由に生きよ」と説いて育ててきた。そのプレッシャーに押しつぶされそうになったアナの葛藤が、この映画のもう一つの見所だ。人間はいつも「強く自由」でいられるのだろうか。これが映画が投げかける問いだ。

米国では「依存」は忌み嫌われる言葉だ。日本にも似たような雰囲気があるかもしれない。小中学校では、教育基本法に基づいて、自立的な人間に成長し、国家・社会に役立つ人間となることが教育の目標なのである。しかし、自立の価値だけを強調することは一面的である。

誰にとっても自立的でありえない状態がありうるからだ。

人は無力な赤子として産み落とされ、100%依存的な存在として人生を始める。その後の人生は人それぞれである。「強く自由に生きる」人もいれば、他人の助力に依存せざるをえない人もいる。けれども、ほとんどの人は最期に 100%依存的な存在として生を閉じていく。それが人生の実相だとすれば、人間は「自由にして依存的な存在」である（ドイツ連邦議会審議会答申『人間の尊厳と遺伝子情報――現代医療の法と倫理（上）』）。

「依存」は忌み嫌われる言葉かもしれない。しかし、依存という面があったからこそ、今日に至るまでの人類文化の発展があった。人間は他の哺乳類などに比べて、圧倒的に長い養育期間を必要とする。子供のとくに母への依存は文化の継承の基盤である。病気や怪我などで他者に依存しなければならない人は、まわりの人々に支えられながら、苦難を乗り越えていく。また、そのような相互支援が社会保障や医療保険、介護保険などの制度として発展してきた。これが人類文化の歴史なのである。支え合い、人と人との絆という文化や制度を築くことができたのは、人間が「依存的存在」であったからだ。

映画にはリリー家族と彼女の親友の 8 人だけが登場する。だがその背後に、「強く自由に生きよ」と迫る現代社会がある。難病をわずらった人の自死への自己決定という「美談」としてではなく、私たちははたしてどのような社会を望んでいるのかにも思いをはせながら作品を味わってみよう。